第四回

清兵衛の年越し

正月は年中行事の中でも大掛りな行事であり、大きな区切りである。特別の思い入れがあるのは、今も昔も変わらないと思われる。その区切りに向かって既に十二月から準備が徐々に始まっていることが見て取れるので、正月の序奏曲である年末を取り上げて当時の京都の商家の年末をみてみたいと思う。

商売としての区切り

商売の年一度の大きな区切りはやはり正月であろう。嘉永五（一八五二）年十二月九日には「**一内代呂物勘定致し候**」とあり、内の、と敢えて言っていることは、外は本家を意味する。代物つまり商品の在庫調べ、棚卸を意味することと思われる。

別家である清兵衛は本家に帳簿閉めに手伝いを行くのが恒例のようだ。次の日の「**今晩例年の通本家帳閉**」が見られる。使用人を行かせるのではなく、清兵衛自身が出向いている。奉公人としてお世話になった事で当然と考えられていたのか。本家での夕食は

「**鯛　日魚　初肴　鯛　作り身　ぶりこ**
塩焼き　吸物　玉子　かぶら　大こん
せり

水物　近江蕪千枚漬け」

鯛の塩焼きはやはり締めくくりのお祝いの気持ちが込められていると思われる。清兵衛はじめ分家、別家などの元の奉公人が集まり、手伝うのが習わしとしてあったとみえる。当時の京都というと、新鮮な魚が入手可能かなど気になるが、鯛もぶりも刺身で食べられるような新鮮な状態で、入手可能だったことがうかがえる。想像以上に流通が発達していたとみるべきであろう。水物は果物の事であるが何かは記されていない。

清兵衛の帳閉めは十一月中にすでに済ませており、帳閉めは家々で異なるようだ。

「店一統　水治　水和

烏賊　初肴　大鯛　白みそ

取肴　つむぎ　大根　吸物　鯛

みかん　豆腐

作り身　ぶりこ

大根おろし」

水治、水和は清兵衛宅のかつての奉公人だったか、呼び捨てにしている。名前の水は屋号の水口屋の略号である。働いている店の全員も加わり、祝い膳を囲んだとみえる。つむぎは小鳥のつぐみのようだ。酒の記述はないが、肴があるので、当然酒が出されと解釈する。本家の帳閉めに劣らずの振る舞いである。吸物に白みそとあるので、ご飯で

も、お酒でもこの汁物一つで済ませたとみる。大鯛を入手し、初肴に吸物にと、使い分けたのであろう。初肴に本家では鯛はかぶとの取り合わせで、清兵衛宅では鯛と大根だ。いずれにしても京風薄味の煮物が思い浮かぶ。ぶりは刺身、味が濃厚なので、大根おろしで食したと思われる。ぶりこはぶりの卵ではなく小ぶりのものと解釈した。

清兵衛宅での商品値札の替えは二十日まで行い「**付替致候　今日中ニ仕舞**」前日も代呂物付け替えをしており、やっと終わったというところだろう。安政四（一八五七）年の例であるが、「**清兵衛一統　日暮酒　鮒昆布巻　近江蕪あんかけ**」酒、肴で家族中含めて労をねぎらったのである。鮒（ふな）の昆布巻きが出されているが、正月料理に限っていないことがうかがえる。この時期になると近江蕪（かぶ）も甘みが増していたことであろう。

暮れの挨拶

十日頃から、ボチボチ年末の挨拶かと思われる贈答が多くある。「歳暮」の文字はないが、寒中見舞と記していたり、特別何も記していなかったりするが、物のやり取りは多くなる。清兵衛日記では見かけない「歳暮」の文字は江戸時代前期、京都の年中行事を記した『日次紀事』（ひなみきじ）延宝四（一六七六）年刊には「歳暮礼」があるので、「歳暮」の言葉がなかったのではないようだ。そこには相互に贈答しあうとあり、具体的には「金銀衣服酒肴」とある。が、「清兵衛日記」ではほとんどが食品である。

嘉永五年十二月十日

「鍵六様ゟ、しぎ鳥壱わ　せり少々到来」

同年十二月十三日に

「稲荷大工ゟ、魚貝壱籠到来致し候」

同年同月十四日に

「大文之お菊様御出被成

土産ニ菓子壱到来致し候　代〇文」

同年同月二十日に

「前田氏ゟ、麩と酒飲烏賊墨付到来致し候」

同年同月二十一日に

「水儀様ゟ、海老ざこ五合到来」

同同年同月二十二日

「井利様ゟ浅草のり五枚到来いたし候」

「水甚ゟほうぼう壱本到来　代〇〇文」

清兵衛と同じく別家とみられる名前の頭に水が付いている水儀様は様が付いているので清兵衛同等以上の者とみる。またいただき物の値踏みを記しているのは後日お返しの参考にするからであろう。金額は暗号であるが自分が理解出来ればいいという事か。鍵

六様ゟ（より）のしぎ鳥は野鳥であろう。お菊様は妻が挨拶に来ているのである。前田氏は医者であるが、持参しているので当然先にお礼の挨拶を受けていると思われる。

到来物を使い回しにすることが当たり前に行われているのも目につく。

安政四年十二月十五日の例に

「大津越作殿ゟ鴨弐羽つがひなり　塩くじ十　但し　糀づけ」出入りの業者、大津の越作殿より、雄雌つがいの鴨と糀付けの塩ぐじ十匹を貰ったが、その日の中に

「同くじ　壱疋万七へ遣し」

「同くじ　壱疋水武へ遣し」と塩ぐじはお遣いものにされていた。しかし塩ぐちは沢山いただいているので「昼時　家内一統　右ぐし四ツ半ヅツ　汁こんぶ」使用人まで渡った。汁はこんぶとあるので、とろろ昆布汁だったのだろう。鴨は来客事に使われている。

同年同月十八日に

「七ツ時前田周亮御出被成候　酒出し

くじ　鴨

からすミ　畑菜　小海老ざこ」

先の前田氏、夕方四時頃お越しになったので、お酒を出し、肴は到来物の鴨、ぐじ、海老ざこでもてなしている。到来物が全部家族で消費していていない事がうかがえる。

清兵衛の年末の礼

清兵衛の暮れの挨拶に使うものはほぼ毎年決まっているが、事情によっては替えることもあった。嘉永五年十二月二十一日に

「一諸方へ寒気見舞　例年くわひ遣し可申処　当年ハくわひ大高値ニ付　板遣し申候」

と例年くわいを配っていたが、今年は大変高いので代わりに板かまぼこにした、とある。本家を筆頭に十軒ほどの名前が記されていた。

正月のお飾り作り

正月のお飾りは家の主人が用意したようだ。安政四年十二月二十一日に「晩ニ本家へかさり習ひニ参り申候」と記されているが毎年のように記されている。共同でしめ縄造りをしていたとのではないか。というのは私の故郷茨城でも最近まで、近所隣が集まってしめ縄造りをしていたからである。

正月の餅つき

正月の餅はどこの家庭でも、自分の家で搗くのが常であった。清兵衛宅では例年十二月二十四日に搗いていた。白い餅だけでなく、雑穀の粟やキビも使っている。お供えの餅はもち米で作り、ほかに本家などへ進呈する餅は白い餅であり、お互いに配りあう。数量は「十三到来」が多くみられるので、あまり大きくない丸餅であったろう。餅を丸くするのは、丸い玉を神霊の象徴と考えられていたからという。正月のお節膳に小さな丸餅を付け、この餅を「年玉」と呼んだといわれる。

餅配りの習わしは時代が下るにしたがって親しい間柄ではお互い様にしようと取り止めるのがみえる。

商家の掛け取り

清兵衛宅の使用人は年末掛け取り（集金）に出歩いているのがうかがえる。

安政四年十二月二十九日に

「四ッ時元助丹波より帰り」と夜十時に帰っている。

一昼時後亀吉丹波亀山迄又金子取二行」

同年同月晦日に

「香助丹波より五ツ時後帰り」夜八時過ぎに帰った。毎年の事で苦労がしのばれる。

師走の施しと礼

『日本歳時記』貝原益軒著、江戸時代前期の貞享五（一六八八）年刊には親戚に贈り物をして「歳暮を賀す」と共に一人住まいや困窮の者には自分の力に応じて財物を贈り、あるいは恩徳のある人やかかりつけの医者などにも分に応じて物を贈るべきだとある。歳暮に公徳性を持たせようとしたと思われる。清兵衛も母子家庭にお金を渡していることが記されてもいる。

正月礼

「極月廿八日

一正月祝儀左之通り遣し
本　下板三枚　代〇〇文
下女三人へ　包糸遣し　代〇〇文
小児へ　手遊之義ハ為替二仕候
香勘　下女二人　手拭壱ツ　代〇〇文
下女弐人　黒朱すえり壱ツツツ　代〇〇文ツツ
其外内二ハ為替二仕候」本は本家の事、さらに七軒の記述があり、返礼も記している。ここで見えてくるのは、内々の礼はお互い様にして取り止めるが、下女下男にはお互いに気配りしているのが目立つ。

晦日は「晩酒　ぶりこ　こんにゃく　組重　にしめ」

「一仕舞次第　本家二行
湯豆腐　ぶり　水な」奉公人はあくまでも本家に気配りを怠らないようである。

【参考文献】

田中宣一・宮田登編『三省堂年中行事事典』三省堂　平成十一年
大久保忠国・木下和子編『江戸語辞典』東京堂出版　平成三年
小川直之著『日本の歳時伝承』KADOKAWA　平成二十年
同志社大学　西村卓ゼミナール編『京の庶民史』かもがわ出版　一九九九年